

## 特集「宝塚—ピアノで踊る日本舞踊」

### 基調報告

## 「宝塚のおどり」

古井戸 秀 夫 (東京大学)

今日は、このあと宝塚の植田先生と花柳流の壽輔先生に、宝塚の歌と踊りとお芝居について、お話を聞かせていただくことになっています。基調報告といえますのは、そのための地ならしと申しますか、下準備でございます。

基調報告は2つに分かれています。踊りを中心に宝塚の歴史を簡単に振り返る、それが前半でございます。両先生には日本ものを中心に宝塚のお話をお聞かせいただこうと思っておりますので、後半は洋ものの群舞を、ビデオで見ていただくことにしました。

「宝塚のおどり」というレジュメと、参考資料①から③までがございますので、それをご覧いただきながら聞いていただければと思います。

宝塚歌劇は、実業家の小林一三がつくった歌劇団でございます。最初の公演は大正3年でございます。1914年でございますので、再来年がちょうど100周年ということになります。

小林一三先生というのは、もちろん歌劇をつくられた方なんですけれども、宝塚歌劇団というのは、舞台上立っているスターさんも、みんな生徒さんなんです。それに対しまして、今日いらしてくださった植田先生のような演出家、作家さん、それから花柳先生のような振付の皆さん、この方は学校の先生という形になっています。ですから生徒さんと先生という関係なんですけれども、小林一三先生は、たぶんいまでも永遠の「校長先生」であり、宝塚のいわば精神的なバックボーンになっているのだらうと思います。

小林一三が考えましたのは、新しい国民のための国民演劇、そういうものをつくろうとしたのだと思います。その国民演劇をつくろうとした考えは、ちょうど小林一三が少女歌劇を考えた約10年前に、坪内逍遙が「新楽劇論」というのを唱えまして、ちょうどそれは日露戦争が勃発したときでした。国民にとっての新しい演劇、それを舞踊劇に求めたんですね。小林一三もまさしく、その新しい国民演劇というものを、音楽劇、あるいは舞踊劇というものに求めたわけです。

小林一三の新しい国民演劇、音楽劇、舞踊劇の大きな特色というのは、3つあると考えています。

1つは家族主義といいたし、ちょうど明治末から大正といえますと、小劇場運動ですとか新舞踊運動ですとか、人間の個人の内面に入って

いく個人的な作業、そのときには、古い家だとか家族だとかを捨てる。あるいは若者の中にはデカダンスの風潮、そういうものがあつた時代だらうと思います。あるいは芸術至上主義、こういうものが流れていた時代、そういう時代に、個人の対極にある明るい家庭というものをまず前提に考えた、これが小林一三のいちばん大きな特色だと思っております。それが後に「清く正しく美しく」と呼ばれる理念になってまいりまして、たぶんそれは今日でも宝塚の一番大きなポイントなのだらうと思います。

2つ目は大劇場主義でございます。最初につくりました宝塚の大劇場は4000人入つたと言われております。現在の宝塚大劇場も2000人以上入る大劇場です。小林一三は、いっぺんにたくさんの人に見ていただくことによって、1人ひとりの入場料を安くしたい、より多くの人に見ていただく国民演劇にしたい、こう考えたところが2つ目の大きな特色です。

3つ目は、小林一三が考えた歌劇の特色です。小林一三は、当時の子どもたちがみんな学校で洋楽を習っている、そしてそれで唱歌を歌っている、ですからそれに基づいて、洋楽で日本語の歌を歌う。そして、その歌に合わせて日本舞踊と西洋舞踊を折衷した、いわば和洋折衷の世界をつくりたい、とこういうふう考えた。

この三つの要素は、現在でも宝塚のいわば精神的な支柱、それから基本的な姿勢になっているのだと思います。

ところで参考資料①を見ていただきたいのですが、これは小林一三が書いた論文の一節ですが、真ん中のところに四角く囲つた部分、ここが歌劇の考え方です。2行目の終わりのところ、「唯だ徒に西洋の音律そのまゝの歌詞を、生硬に、聴かせるといふ様な不自然なことを避けて、つとめて日本的に、学校で習つた唱歌が仮に楷書であるものとすれば、これを軟く、行書、草書位にくだいて、親みやすく唄はせる、直に共鳴し得る程度の歌と西洋のダンスと、日本の踊との調和すべき一致点を見逃さぬだけの注意」が必要なのだ、と言っている。

即ち、音楽についてはすごく具体的なんです。学校で唱歌を習っているだけけれども、それはつまらない。だから少し崩して、面白い、みんな

なが好きになるような音楽で歌うんだということ。じゃ、踊りはどうするかというと、おどりはどうもあまりお得意じゃなかったようで、非常に観念的な、日本舞踊と西洋のダンスが1つになるようなものを考えなさい、と言っているわけですね。

第1回の公演は大正3年で、その出し物が参考資料②というところ、1ページめくっていただいたところにごさいます。

よく、簡単な本なんかを見ますと、このときは2つ、3つの作品しか上演されていないように見えますが、実はたくさんの演目が出ているんですね。1番に「管弦」と言って、楽器の演奏ですね、それが9番。次に「唱歌」、歌ですね、それが10番。3番目に「舞踏」ダンスが8番出て、そして最後の4番目に「歌劇」が2つ出ているんです。「舞踏」の一番最初にやっている「胡蝶」というのは、これはもうすでに東京の帝劇で上演されていた音楽と楽譜を借りてきて、それに、宝塚の先生というよりも、大阪の高等女学校の中島先生というダンスの先生が振り付けたのだと言われてます。目玉は4番目の歌劇ですけれども、この2つの歌劇も、ともに既成作品で、作曲家の北村季晴や本居長世がもうすでに上演していたものを、小林一三が楽譜と台本を借りてきて、そして宝塚の振付の久松一声が振り付けてできたものなんです。

その中でいちばん注目されたのが歌劇『ドンブラコ』。これは桃太郎の御伽話を歌劇にしたものです。ちょっと音を聴いていただけますでしょうか。これは宝塚ではないのですけれども、その当時に録音されたものです。

#### < 音楽 > 『ドンブラコ』第一場「桃太郎出生」

ちょっと雑音がひどいですが、リズムは皆さんおわかりになりますよね。久松一声は日本舞踊家なので、このリズムにあわせて日本舞踊を教えたんです。桃太郎さんが帰って来るときには、「勸進帳」の弁慶がやる飛び六方を振り付けたのですけれども、踊っているのが大体中学の2年生とか3年生ぐらいの少女なんですから、手の動きはできるのですけれども、荒事のように足を強く踏めないんですよね。そこで久松一声は、上半身を日本舞踊にして、下半身をリズムに合わせてやわらかく動く振りを付けたんです。

この作品ではないのですけれども、数年後に歌舞伎俳優の松本幸四郎、この方は日本舞踊の家元の藤間勘右衛門でもあるのですけれども、この方がひとに勧められて、わざわざ宝塚まで行って、宝塚の歌劇を見ているんです。その印象を書きましたのが参考資料③というところなんです。幸四郎一勘右衛門はこう言っているんですね。「振もま

た腰から下の運動はオーケストラの西洋楽に巧く合い、腰から上の運動は日本の舞踊を器用に取り入れて、この二つが目立たないように混和されてるのは実に感心です」と。

すなわち、上半身で日本舞踊を踊って、下半身で洋楽のリズムをとっているんだ、ということです。これが宝塚がつくり出した和洋折衷のダンスというものの基本になるんです。

さらに幸四郎は、次のように言っています。「三つ拍子の作曲があるのに、これを四つ拍子にして用いつつあるのが日本の音楽の欠点です」と。すなわち、外国には3拍子というのがあるんだけれども、日本のダンスには3拍子がまだあんまりなかったんですね。だから、それをみんな4拍子に直していた。自分たちは3拍子をやりたかったんだけれども、できなかった。それを宝塚の少女たちがやっているのは感心だ、と言っているんです。

久松一声は、それをこう言っています。日本舞踊は4拍子とか8拍子が基礎なんだけれども、それを勝手に6拍子に変えてしまった。途中から8拍子が6拍子になる、そういう踊りの体系を宝塚は生み出すことになるわけです。

久松一声は、日本舞踊の難しい振りを子どもたちができるようにやわらかくして、あるいは太鼓を叩きながら、鼓を打ちながら踊る。そういうことにして新しい日本舞踊をつくらうとしたんです。

そのときに大切なのは、古い約束ごとを壊して、形より心、具体的に言うとうどういうことかということ、春の歌を歌っている時には春らしく、秋の歌詞に対しては秋らしい心持ちで踊りなさいと、こういうことを教えたんです。これが日本的な郷愁を巧みに生かした「宝塚情緒」、あるいは「久松情緒」と呼ばれる、初期の宝塚を彩る美学的な根拠になってくるわけです。

さあ、そういうような形で「宝塚情緒」というものがつくられていくわけですけれども、そういうものをつくりあげた振付の先生方、宝塚では古くは演出家のことを「振付」と言っていたんですけれども、レジメの(3)がその名前でございます。

久松一声と榎茂都陸平という2人は日本舞踊家です。そして久松一声は、後に水木流の家元預かりになった方です。榎茂都陸平は榎茂都流の家元になる方です。ですから、そういう人たちが宝塚に入ってくると、音楽は洋楽なので、久松一声は独学でドレミファソラシドを覚えた。榎茂都陸平に至っては、ピアノが弾けるようになって、しかもバレエの洋書を取り寄せて、そして生徒たちにトウダンスを教えて、高木徳子しか目立ったトウダンサーがいなかった時代に、宝塚に何人ものトウダンサーを育てるということになるんです。

1人飛ばしまして、岸田辰弥は帝劇歌劇部出身

で、オペラ歌手なんですけれども、同時にローシーにバレエを習った方です。この方が弟子の白井鐵造——この方はダンサーなんですけれども——を連れて宝塚に乗り込んで、言うならばレビューというものをつくっていくことになるわけです。

そして、異色なところでは岩村和雄ですね。岩村和雄はもともとアメリカに行って電気照明を習った人なんですけれども、同時にドイツでダルクローズやリトミックを習った人で、この人が宝塚にダルクローズやリトミックを本格的に入れることになるのです。

ところで、これが大きな流れなんですけれども、これを生徒さん、役者さんのほうから見ますと、「宝塚情緒」の時代は「桃太郎」の主人公をやりました高峰妙子は数え年で15歳でした。いまで言うと中学2年生です。そして、今度はレビューの時代になりますと、その最初のレビューを歌いました奈良美也子は数え年21歳です。

そして戦後になりますと、白井鐵造の『虞美人』という大作がつくられます。それから植田先生の「宝塚グランド・ロマン」と呼ばれるようなドラマティックな作品がつくられるようになる。この『虞美人』の主演をしました春日野八千代は37歳でした。それから植田先生の『ベルサイユのばら』のアントワネットの初風諄は満で33歳、共演をしました榛名由梨は29歳、大滝子は31歳です。すなわち、宝塚の歴史というのは、10代の少女による日本的な「宝塚情緒」と呼ばれるものから、やがて20代の女性たちのレビューの時代を迎える。そして30代の女性のドラマティックなもの、この3つが、消えていくのではなくて、3つが残って現在の宝塚歌劇というものを形作っているのではないのでしょうか。

さあ、お話はそのくらいにさせていただきました。少し皆さんに洋もののダンスを見ていただきたいと思います。3つ見ていただくのですけれども、最初は男役の群舞。宝塚を代表する現代の振付師でございます羽山紀代美先生の作品で、『国境のない地図』というのを見ていただきます。これは燕尾服のダンスで、「黒燕尾」と呼ばれているものです。

#### < 映像 > 『国境のない地図』(2005)

もっともっと見ていたい気持ちなんですけれども、これくらいで。

次は娘役のラインダンス、「ロケット」です。これは植田紳爾先生が1974年に初演されました『ベルサイユのばら』です。ベルサイユ宮殿の近衛兵たちの、しかもかわいいお人形さんのような近衛兵による「ロケット」です。

#### < 映像 > 『ベルサイユのばら』(1974)

見ていただくとわかりますように、「黒燕尾」は大人の男性の魅力ですね。この「ロケット」は、小さな少女の愛くるしさが出ていましたね。

最後に「パレード」というのを見ていきます。これはフィナーレの最後に大階段というのを設えまして、そこからスターさんが次々出てきて、オーケストラの前の「銀橋」でお別れをする。そのとき、背中に大きな羽根、これは駝鳥の羽根になりますけれども、それをつけています。

#### < 映像 > 『アプローズ・タカラヅカ』(2004)

こうやって、次から次へと主題歌を歌いながら出てくるのが、先ほどの2つのダンスと違うところですよ。

宝塚の踊り、特に洋舞を見ていただきましたので、休憩のあとは植田先生、壽輔先生に日本ものも含めた宝塚の歌と踊りと、それからお芝居についてお話を聞きたいと思います。その下準備の報告をこれで終わらせていただきます。(拍手)